

は し が き

近年、児童生徒人口の減少、障害の発生原因となる疾病の出現率の低下などにより、盲・聾・養護学校、小・中学校特殊学級でおしなべて児童生徒数が減少している中で、自閉症児を主たる対象とする情緒障害児の特殊学級のみは、学級数、児童生徒数とも増加してきました。また、精神薄弱養護学校でも、自閉症あるいは自閉的傾向をもつ児童生徒が増えており、今では養護学校でも四分の一から三分の一くらいを占めるに至っているとも言われております。

このように教育現場では数多く見られるようになった自閉症児ではありますが、自閉症の本質をどう考えるかなどについては、多くの議論がなされ、この50年の間に、議論の趨勢は大きく揺れ動き三転三転の変遷を経てきたという状況です。このことは、自閉症の本質を実証的に捉えることの難しさを物語っているといえます。だからまだ、医学的にも、心理学的にも十分に分かっているとは言えないようです。したがって、その指導法についても確立したものはあまりなく、どの自閉症児にも有効な単一の指導法というものはないとも言えます。指導にあたって大切なことは、指導に関する豊かな情報をもつことと、児童生徒に合わせた柔軟な適応だといわれています。

本報告では、まず自閉症児に対しての多様な理論や方法の中から、指導に役立つ情報を整理考察し、そして、それに基づいてそれぞれの場で行われた、その子に応じた指導の実践例を紹介しています。

一つの実践例を見ても、実際の指導においては複雑な背景があり、これをそのまま利用できるものではないと思われますが、児童生徒の障害の状態や学校の実態等に応じて少しでも参考にさせていただければ幸いです。

平成 5 年 3 月

新潟県立教育センター所長 大 澤 正